

「晩秋を描いた名画と俳句」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ostrouhov_Zolotaya_Osen.jpg

1886年 | キャンバス、油彩 | 48.2 × 66.3 cm | モスクワ、国立トレチャコフ美術館

今回よりめぐり来る季節に合う名画と俳句を選びお届けします。

第1回目は晩秋を描いた名画と俳句です。

絵画の制作年順にとりあげています。

ミレー、ゴッホ、シスレー、レヴィタン、オストロウホフの作品で晩秋を感じていただき、世界最短の定型詩で俳人の季節に対する感性をお楽しみ下さい。

1. 落穂拾い ジャン=フランソワ・ミレー (1814-1875)



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Jean-Fran%27ois Millet - Gleaners - Google Art Project.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Jean-Fran%27ois_Millet_-_Gleaners_-_Google_Art_Project.jpg)

1857年 | キャンバス、油彩 | 83.5 × 110 cm | オルセー美術館

敬虔な信仰心と情愛に満ちた表現で農村生活を描き、詩的でメランコリックな雰囲気のある作風を確立したミレーの代表作<<落穂拾い>>です。

遠景の積み藁のあたりには地主と小作人たちによる豊かな収穫が描かれ、近景では刈り入れ後の畑に残された落穂を拾い集めて生活の糧とする農婦たちの姿が対比され描かれています。

落ち穂拾いは農民の中でも貧しいものが刈り入れ後の麦の落穂を拾って糧とする、生きるために認められた権利でした。

近代まで続いた習慣ですが、その起源は古く、旧約聖書に求められます。

なお、描かれた季節は夏ではないかとの説もありますが、服装や栽培されている畑の広さから秋に収穫される春小麦である説が有力です。

ここでは晩秋の季語「落穂拾い」を詠んだ句を選びました。

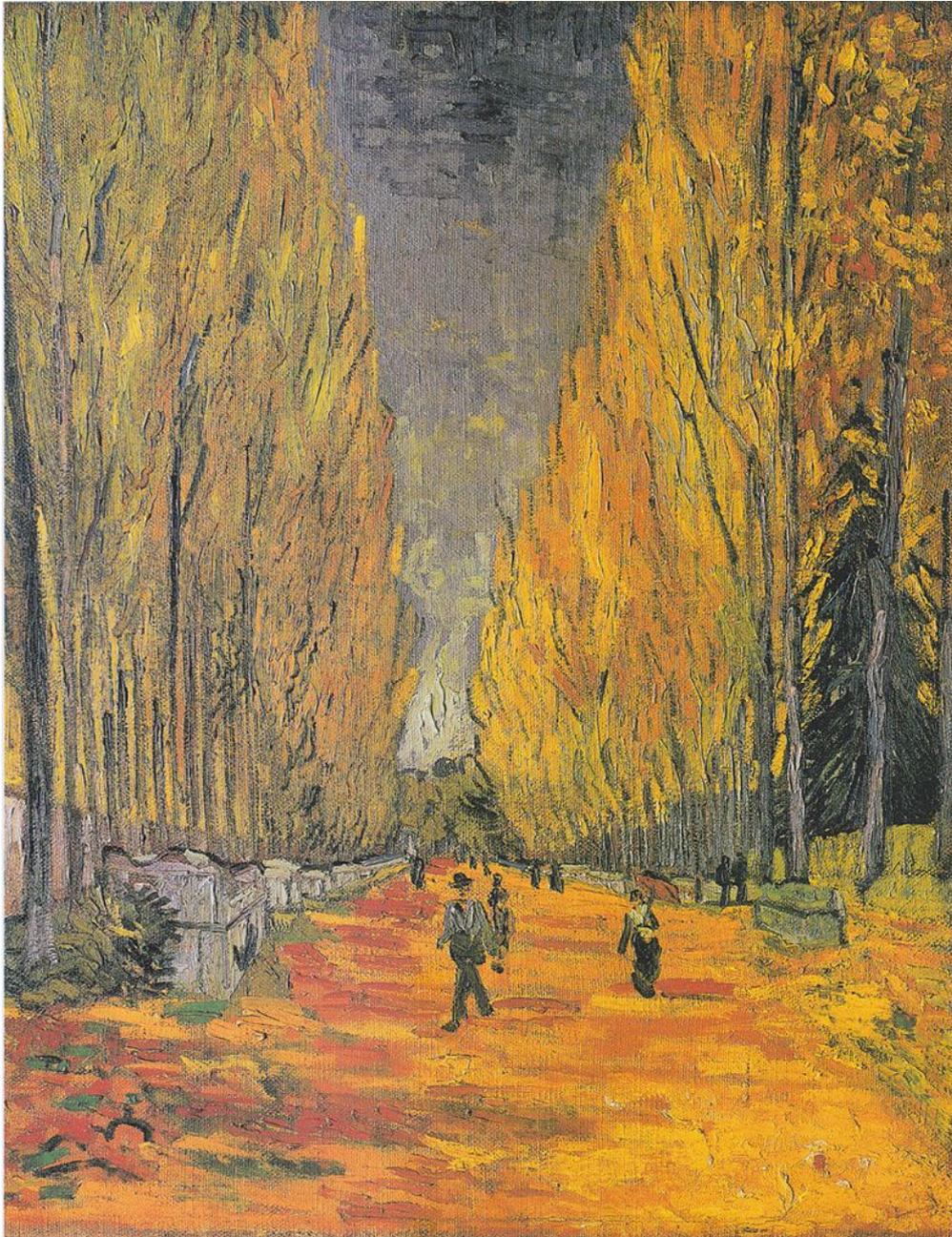
落ち穂拾ひ日あたる方へあゆみ行く

与謝蕪村

うしろ手をときては拾ふ落穂かな

松藤夏山

2. アリスカンの並木道 フィンセント・ファン・ゴッホ (1853-1890)



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Van Gogh - Les Alyscamps, Allee in Arles1.jpeg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Van_Gogh_-_Les_Alyscamps,_Allee_in_Arles1.jpeg)

1888年 | キャンバス、油絵 | 92 × 73.5 cm | 私蔵

ゴッホは牧師の家に生まれ、職を転々としますが、ついに画家を志し 1886 年、パリに出ます。印象派の画家たちと知り合い、点描主義や日本の浮世絵に影響を受け、強烈な色彩とリズム感のあるタッチの画風を確立しました。

1888 年、芸術家村をつくろうとアルルに移り、ゴーギャンを招きますが、村をつくることは実現しませんでした。

次第に精神を病み、サン＝レミの療養所に入ります。

その後も傑作を生みつづけましたが、1890 年ピストル自殺によってその短い生涯を終えました。

アリスカンは南フランスのアルルにある古代ローマからの墓地遺跡で、紅葉の名所でもあります。アリスカンはラテン語で「極楽」という意味で、多くの人々がここに眠ることを望んだ土地です。ゴーギャンもこの並木道を描いています。

ポプラ並木の下には石棺がずらりと並び、見事に紅葉した木々の列が両側にのびています。

ここでは「石棺」を詠んだ句を選びました。

石棺に色なき風の出入りかな

都築智子

季語<色なき風>で三秋

石棺にはいりいちめん銀杏の葉

和知喜八

季語<散る銀杏>で晩秋

3. 積みわら アルフレッド・シスレー (1839-1899)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alfred_Sisley_020.jpg

1895年 | キャンバス、油彩 | 60 × 73 cm | ハンブルク、アクアヴィラ・ギャラリー・コレクション蔵

シスレーはイギリス人ですが、主にフランスで活動した画家。
1862年にモネやルノワールなどとお会いして制作をともにします。
1871年からパリ近郊のセヌ河畔の町を転々とし空や水辺の風景画を多く描きました。
明るい色調、自在な筆づかいで、光や大気が移ろいゆく効果を探求し、印象派のグループにとって欠かせない存在でした。
前出のミレーの<<落ち穂拾い>>の遠景にも登場しているように 19世紀の風景画家は「積みわら」をよく描いています。
どこにでもある親しい風物だったのでしょ。う。
ミレーのはやや暗いイメージがあり、モネのはオブジェ的ですが、シスレーの積みわらは自然と交流している人が描かれ、あくまでのどかな風景です。
草原の色が日の当たっているところと影のところの色の対比がなんともさわやかです。

ここでは晩秋の季語「藁塚」を詠んだ句を選びました。

道の端大藁塚の乗出せる

松本たかし

藁塚となりてぬくもりたき日和

鷹羽狩行

4. 黄金の秋 イサーク・レヴィタン (1860-1900)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Levitan_Zolotaya_Osen.jpg

1895年 | キャンバス、油絵 | 83.6 × 127.2cm | モスクワ、国立トレチャコフ美術館

イサーク・レヴィタンはロシアの有名な風景画家。
1873年-1885年にモスクワ絵画彫刻建築学校で学ぶ。
官立美術アカデミーの制約に抗議したロシア・リアリズム美術の画家集団「移動派」に参加。
レヴィタンの芸術は、ロシア美術における「情感を伝える風景画」の誕生と結びついています。
レヴィタンは秋を描くことをこよなく愛し、合計100点をこえる秋の風景画を描いています。
その中でも最も好んで描いたのは森林や穏やかな田舎にある詩的な場所でした。
この作品でも白樺の木、色づいた木々、川が明るい色彩で描かれ、ゆったりとしたロシア民謡が聞こえてきそうです。

「白樺の花」ですと晩春の季語ですが、「白樺」のみだと他に季語を加えて詠まれます。

ここでは「白樺」＋晩秋の季語で詠まれた句を選びました。

白樺の裸身紅葉の天に照る

中島斌男

季語＜紅葉＞で晩秋

はじまりし白樺落葉牧閉す

三村純也

季語＜牧閉す＝まきとぎす＞で晩秋

5. 錦秋 イリヤ・オストロウーホフ (1858-1929)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Ostrouhov_Zolotaya_Osen.jpg

1886年 | キャンバス、油彩 | 48.2 × 66.3 cm | モスクワ、国立トレチャコフ美術館

オストロウーホフはモスクワの製粉業を営む家に生まれ、幼いころは児童書を収集し、青年期には自然科学に関心を持ち、鳥の巣や卵などを収集しています。

1886年に開催された移動美術展覧会で画家としてデビュー。

画家になってからは、ロシア近代絵画を代表する画家イリヤ・レーピンの作品を収集するなどコレクターとしても活動。

1900年にはパリ万国博覧会のロシア美術部門の主催者を務める。

また、舞台装置の図案を描くなど多方面で活躍し、風景画や肖像画も描いています。

紹介する風景画は1886年制作の「錦秋」です。

黄金色に輝く黄葉、落葉が画面を埋め尽くしています。

寒いロシアの紅葉、黄葉はひととき鮮やかです。

生命が輝いた夏が過ぎ、やがて訪れる厳しい冬の前に、一年の最後の華やぎを装っている森がなんとも美しい。

ここでは晩秋の季語「黄葉（こうよう、もみじ）」を詠んだ句を選びました。

黄葉して隠れ現る零余子蔓（黄葉＝もみじ、零余子＝むかご）

高浜虚子

紅葉より黄葉へ霧の音走る（紅葉＝もみじ、黄葉＝もみじ）

小松崎爽青

私も詠んでみました。

詩集読む银杏黄葉を栞とし（银杏黄葉＝いちょうもみじ）（栞＝しおり）

白井芳雄

今回は「晩秋を描いた名画と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：海野 弘

『366日 風景画をめぐる旅』(パイ インターナショナル)(2021年)
ISBN978-4-7562-5445-0 C0071

瀧澤秀保

『366日の西洋美術』(三オブックス)(2019年)
ISBN978-4-8667-3135-3 C0071

靱山昌夫

『レーピンとロシア近代絵画の煌めき』(東京美術)(2018年)
ISBN978-4-8087-1120-7 C0071

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修

『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』(講談社)
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 新年』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621035-4 C0392

『角川俳句大歳時記 春』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』(角川学芸出版)
ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』(角川学芸出版)
ISBN4-04-621034-6 C0392

本間美加子

『日本の365日を愛おしむ』(東邦出版)
ISBN978-4-8094-1652-1 C0076

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3F

TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com